



TITLE:

木下恵介におけるクィアな感性の
探求 ― 1950年代の作品を中心
に (Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

久保, 豊

CITATION:

久保, 豊. 木下恵介におけるクィアな感性の探求 ― 1950年代の作品
を中心に. 京都大学, 2017, 博士(人間・環境学)

ISSUE DATE:

2017-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k20462>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開; 許諾条件により要約は2017-05-
01に公開

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	久保 豊
論文題目	木下恵介におけるクィアな感性の探求 ―1950年代の作品を中心に (論文内容の要旨) 本論文は、映画監督・木下恵介におけるクィアな感性を、1940年代後半から1950年代後半までの作品群に分析の照準を定めて、探求したものである。クィアな感性とは、異性愛規範（ヘテロノーマティヴィティ）を基盤とする近代社会において、その規範に束縛・抑圧される、あるいはその規範から逸脱する者たちに寄り添い、彼らおよび彼らを取り巻く人々の感情の機微や置かれた環境の諸相を十全に理解し、描き出そうとする感性である。1943年に監督デビューした木下は、1950年代日本映画黄金期を支えた監督の一人として活躍する中で、強制的な異性愛やジェンダー二項対立の枠組みに囚われることのない人間同士の関係性に映画的表象を与え、観客に伝えるべく、全身全霊を注いだ。本論文は、木下のこうした努力をクィアな感性の探求と捉え、その展開と到達点を明らかにするとともに、作家論的意義、戦後日本における映画史的意義を確認した。 構成に関しては、序論と結論を除く全五章を木下の監督経歴の時系列に沿って展開し、木下のクィアな感性がどのような形で現れ、洗練されていくか、検証している。研究方法としては、テキスト分析を中心としつつ、シナリオなどの制作資料、新聞記事、映画雑誌、宣伝広告なども視野に収めている。具体的な論述内容は以下の通りである。 序論では、クィアな感性の基盤概念である「ゲイの感性」に関する議論を検証した後、木下映画をめぐるゲイ批評の言説を踏まえ、作品の再評価におけるクィアな感性の重要性を確認している。 第一章ではまず、異性愛カップルが最終的に結婚に至るロマンティック・コメディとして一般に受容されている『お嬢さん乾杯』（1949年）について、異性愛に囚われない関係性の表象を確認している。まず、佐野周二と佐田啓二という男優二人のスター・イメージを再検討し、その上で、両者の関係について映像、音声両面から分析し、男性同性愛的解釈の可能性を明らかにする。次に、原節子が戦前から戦後へと引き継いだ女学生イメージ、さらには小津安二郎の『麦秋』（1951年）等において原が演じた紀子に表出するレズビアン性に注目する。こうした映画史的文脈を踏まえることで、『お嬢さん乾杯』の主人公とヒロインの関係性について、異性愛規範に囚われない読みを提唱している。		

第二章では、日本映画初の長編総天然色映画『カルメン故郷に帰る』（1951年）の時代背景、製作過程を踏まえつつ、主人公リリィ・カルメンの表象を、色彩、音楽、演技、受容の四点から再検討している。続編『カルメン純情す』（1952年）におけるカルメン表象と接続しつつ、理想的な女性像から逸脱したカルメンが芸術を用いて生き抜く姿とクィアな感性との関連性を明らかにしている。

第三章では、『海の花火』（1951年）に見られる男性同士の親密さの生成過程を、繰り返し編集、構図、演出方法など具体的なテキスト分析によって解明している。とりわけ男性間の繰り返し編集と異性間の繰り返し編集とを比較することで、作品の映画戦略を明らかにしている。男性主人公がもっとも親密な関係性を結ぶ相手は、女性ではなく、少年であり、そのことは作品全体を通して裏付けられていると結論づける。

第四章では『夕やけ雲』（1956年）における少年同士の情動表象とフラッシュバック構造との結びつきを考察している。論点は二つ。一つは映画ジャンル（ホームドラマ）の根底にある異性愛構造との関係、もう一つは、クィア性に対するフラッシュバックの解放区的機能である。本章では、主人公と親友の友情だけでなく、双眼鏡越しに見える綺麗な女性に対する主人公の憧れのまなざしを、異性愛規範の枠組みから自由な理想化された関係性として捉えている。クィアな感性という視点からフラッシュバックの効果を検討することで、この映画技法には、現在軸では失われた、あるいは手の届かない世界への夢が託されていることが確認される。

第五章では、木下におけるクィアな感性の探求が『惜春鳥』（1959年）において結実していることを、ミザンセヌ、映画技法、物語話法、そしてローカリティと物語の連関性の分析を通して証明している。申請者は、会津若松でのロケーション撮影に起因するローカリティの真正性の役割を確認するとともに、現在および準現在を行き来するフラッシュバックが、理想化された友愛を映像化するための技法として用いられていることを明らかにしている。この関連において、結末近くで展開される舞台場面についても、ロケーション撮影的なリアリズムから逸脱する異質な演出であることを確認するとともに、それが家父長制社会から決別したクィアな関係性を探求できる空間として提示され、作品世界に見事に統合されていることを論証した。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、映画監督木下恵介と「クィアな感性」の関係性を独自の視点から考察し、1950年代の日本映画黄金期において木下の作家的特質が形成、洗練されていく過程を明らかにしている。

本論文最大の意義は、木下映画をめぐるゲイ批評およびクィア映画理論の先行研究を踏まえ、戦後日本映画におけるクィアな感性の表出様態を学術的に同定した点にある。異性愛規範が近代社会のジェンダー・セクシュアリティを支配する中、映画芸術は、19世紀末における誕生以降、異性愛中心主義によってその物語世界を規定されてきた。それに対して木下は、公式的には体制に従いつつも、規範から自由な人間関係の表象を目指し、大衆映画作品の変革を試みた。この理解に基づき、申請者は、クィアな感性を軸として木下映画を再検討している。

第一章では、恋愛喜劇として公開された『お嬢さん乾杯』を取り上げ、木下のクィアな感性の出発点として位置づけている。第二章では、『カルメン故郷に帰る』の同名の主人公、リリィ・カルメンの闘いを占領下日本のセクシュアリティ表象の文脈で捉え直すとともに、続編『カルメン純情す』におけるヒロイン像の変貌と関係づけ、両作品を一つの連続体として再評価を試みた。ともすれば軽視されてきたカルメン二部作に対して、多面的かつ綿密なテキスト分析を行い、異性愛規範とカルメンの関係性の全貌をあまねく解明した点において、本章は大きな意義を有する。第三章で展開されたメロドラマ『海の花火』分析の研究意義は、従来、内容分析のみで論じられてきた男性同士の親密性の表象に対して、切り返し編集、ショット構成、演出方法という観点から、体系的なテキスト分析を行った点にある。第四章における『夕やけ雲』論では、ホームドラマ・ジャンルとフラッシュバックの融合という特異な作品構造をクィアな感性の表象という観点から解明した。映画技法分析、一次資料に基づく製作過程の分析は、『海の花火』論同様、今後の木下研究を方向づける大きな一歩である。木下の他作品にも援用しうる方法論的基盤を構築した点、高く評価できる。第五章における『惜春鳥』論は、詳細なテキスト分析と同時代のセクシュアリティ言説の検証とを融合させ、クィアな感性の探求の到達点として作品の再評価を説得的に成し遂げている。

申請者の議論は、クィアな感性の探求という一貫性を保ちながら展開され、これまでの映画研究において見過ごされてきた木下映画の独自性を解明した。もっとも、本論文は広い射程を持つ反面、分析の精緻化の余地を残していることも事実である。戦中から占領期、そしてポスト占領期にいたる日本のジェンダー・セクシュアリティの様態については、膨大な歴史史料と先行研究に基づく具体的な裏付けが必要である。また、申請者が探求するクィアな感性というテーマは、映画のみならず、演劇、文学、美術、音楽など他芸術、さらには同時代の外国映画をも視野に収めて、再検討されなければならない。

とはいえ、本論文は、徹底したテキスト分析と綿密な資料調査によって木下映画の再評価に向けた基盤の構築に成功し、映画学とジェンダー・セクシュアリティ研究／

クィア研究の未来に向けて重要な示唆をもたらしている。その点で、本論文は、共生人間学専攻、人間社会論講座の理念に十分に適合する研究と言えるだろう。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成29年1月26日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降